

国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十二ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. 試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	

一
次の文章を読んで、後の問に答えよ。(本文の表記を一部改めた箇所がある)

日本にも宗教と政治の厳しい対立はあった。一五世紀末から一〇〇年ほど続いた加賀の本願寺門徒らによる一向一揆、織田信長の比叡山の焼打ち、明治の廃仏毀釈などなど、思い浮かぶ事例はある。宗教と政治の関係が歴史の底流にも認められるという点では、日本もヨーロッパと大きく異なるわけではない。しかし日本の場合、大量の殺戮を伴う大規模な「宗教戦争」が起こっていないという点でヨーロッパとは問題の現れ方は異なっていた。

ここでは「キリスト教と政治」という日本ではやや周辺のとも見える問題に限定し、「足尾銅山問題」をめぐるキリスト教徒の内村鑑三と、社会主義に傾斜した田中正造の政治運動の

I

についてふれておこう。

幕末から明治初期にかけて閉山状態に近かった足尾銅山は、民間払い下げを受けた古河市兵衛が、一八八〇年代前半の開削の過程で発見された大鉱脈を、西欧技術を導入することによってわずか一〇年たらずで東アジア有数の銅生産地として発展させたものである。しかし銅の精錬の過程で発生する「燃料の排煙」、「鉱毒ガス(主に二酸化硫黄)」、「排水に含まれる金属イオン」によって、渡良瀬川流域の広大な農地・森林を中心に、近隣の環境を破壊する甚大な被害が発生するようになる。

この足尾鉱毒問題に立ち向ったのが、地元の農民運動と自由民権運動の指導的立場にあった田中正造であった。田中は足尾鉱毒事件について明治天皇へ直訴におよび、その場で警察官に取り押さえられたこともあった。その後も、田中は本郷中央会堂で足尾鉱毒地救助演説会を開くなど、^b 怯むことなく活動を続けて行く。

一方、内村鑑三もこの足尾鉱毒問題に注目し、木下尚江、黒岩涙香、幸徳秋水らの同行を得て、一九〇一年四月二二日、鉱毒被害地を訪れ、その惨状と怒りを「^b 鉱毒地巡遊記」として、『^c 萬朝報』に連載している。内村はその後も、「田中正造翁の入獄」と題する文章を『萬朝報』(一九〇二年六月二一日)に載せ「義の為に責めらるる者は福なり」として獄中の田中正造を激励するほどであった。

だが次第に田中の運動に対して内村は批判的になる。それは、「キリスト教無しの社会主義」への批判として、内村の中にな

だかまり続けていた問題と関わっていた。「聖書の研究なんて、そんな事を早く止めて、鉅毒事件に従事しなさい」、あるいは「古書を棄て現代を救え」といった田中のゲンジ^アが二人の対立を決定づける。

^A 両者の対立点はどこにあったのか。内村鑑三の政治に対する基本姿勢は、「キリスト教は政治を語らず、しかれども偉大な国家はその上に建設せられたり」、というところにあった。先にも触れたように、社会主義に対しては「キリスト教無しの社会主義は最も醜悪なる君主主義よりも危険なり。社会主義奨励すべし、しかれどもこれをキリスト教的に奨励すべし。これをして改心和合一致の結果たらしむべし、制度法律の結果たらしむべからず」と内村は考えていた。したがって聖書の研究こそが社会改良の最良の法であり、渡良瀬川に聖書が行きわたるときが鉅毒問題の解決される時である、というのが内村の動かざる主張となった。貴き「愛心」がなければこの問題の正しい解決は得られないことを強調するのである。

一方、内村に対する田中の共感と敬意は否定できないとしても、足尾の問題が「政治を超えて、あるいはそれを除外しての解決などあり得ない」というのが田中の確信であった。だとすれば、両者の間の溝が深まるのは自然な成り行きであった。「内村氏の聖書研究は吝しよくの母が袋るの中より饒じう一つづつ出して子供に与うる如し」という田中の痛烈な内村批判も、自らを義民「佐倉惣五郎」にギ^イしていた田中の覚悟の言葉であったと考えられる。

国家によって満たされる人間のこの世の目的と、宗教によって追求される超自然的目的は截然と二つに分離分割されるわけではない。内村もその点について十分認識していたと思われる。しかしあくまで人間はひとつの超自然的目的のみを持っており、地上的な事柄としての政治はこの目的達成を容易にするための仕事に過ぎないと考えたところに、政治と宗教の捉え方について田中正造との決定的な違いがあったのだ。

日本人にとっての権威あるいは権力とは何か。宗教と政治に対する姿勢は西洋のそれとどこが異なつたのか。この点で参考になるのは福沢諭吉の所論である。福沢は『文明論之概略』第八章「西洋文明の由来」で、西洋文明の根源が「権力の性」にある点に論を集中させている。西洋には、理性が答えられない問題に対して幽冥の理を説く教会権力、自由都市などに代表される民衆の権力（デモクラシー）、そして王権、貴族勢力というように、いくつかの権力が並立してきたこ

と、ゲルマンの野蠻と自由独立の氣風には近代への連続性があることなどを指摘し、こうした多様な精神と複數の權力がひとつの政府に集まつて「統治」が成立したという歴史の経緯を説明する。

それに対して日本はどうか。福沢は同書の第九章「日本文明の由来」で、西洋の權力が(教会、王権、貴族、市民というように) III 的であるのに対して、日本の權力は IV 的であり、バランスが取れておらず、「權力の偏重」が著

しい点の特徴だと言う。この「權力の偏重」は日本人のあらゆる人間關係に伏在する。男女の交際では男が、親子においては親が、兄弟では兄が權力をふるう。「權力の偏重」は、シテイ、主従、貧富貴賤、新参古参、本家末家にまで及ぶと指摘するのだ。

福沢の解釈の重要な点は、「權力の偏重」が日本人全体を「治者と被治者」という二つの異なる意識を持つ社会集団に分断し、独立した自立の精神を眠らせてしまったということである。その結果、宗教も學問も商売も工業も、すべて政府のなかへと籠絡されるようになった。人々は、階級の間の隔壁を自ら取り除こうとはせず、自分の階級から抜け出すことを立身出世や榮達として賛美したのである。その典型は「太閤さん崇拜」だろう。福沢の観点からすれば、藤吉郎(豊臣秀吉)は単に仲間を見捨てた利己的な男に過ぎない。「人民の權義を主張し正理を唱えて政府に迫りその命を棄てて終りをよくし、世界中に対して恥ずることなかるべき者」は日本では古来珍しい。その例外としては「佐倉惣五郎」が挙げられるくらいではないかと『學問のすゝめ』七編「國民の職分を論ず」。

この点において、福沢が、キリスト教の自己犠牲の思想に深い理解を示していたこと(あるいは福沢の思想とキリスト教との親近性)は見逃せない。それは彼が説く「マルチルドム(martyrdom)」「すなわち「世を患うれいて身を苦しめ或いは命を落す」殉教の思想である。自分の命を棄てて、多くの人々を救うという殉教思想を、福沢は、失うのは命ひとつであるが、その効能は「千万人を殺し千万両を費やしたる内乱のいくさよりも遙かに優まされり」と高く評価するのである。その思想が日本にあるかと問うて、次のように応える。日本には討死や切腹は多い。彼らは忠臣義士と評判は高いが、命を棄てる理由は政權争いか主人の敵討ちなどのためであつて、「その形は美に似たれどもその実は世に益することなし」と批判する。確かに忠義は尊いが、ただ命さえ棄てれば「忠義」だと言うのはおかしいと述べる。

ここには「私利」のために仲間を打ち捨てて立身出世を企てる「私智・私徳」のみに凝り固まった人物を礼賛してきた日本の民情への強い批判が込められている。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ福音書)という言葉が示すように、西洋社会では、仲間のために命を投げ出す者にこそ畏敬と崇拜の念が払われるのに対して、日本では、自分の栄達のために仲間を打ち棄て立身出世を成し遂げた者を崇める。この私益重視の価値観は西洋人に共感を呼ぶことはないと言福沢は言う。

日本では「公」は政府であり支配者を意味した。「日本にはただ政府ありて国民(ネーション)なし」と福沢は見る。階級間の隔壁を取り除くことを試みたものはほとんどいない。宗教も、政治に取り入ること、権力と一体化することに執心し、それがために日本には大規模な宗教戦争は起こらなかった。学問も治者の学問となることに努め、宗教も専制を助けることになった。こうした「権力の偏重」が日本の文明の進歩を阻んできたのだと福沢は『文明論之概略』で論じたのである。

(猪木武徳『自由の思想史』による)

注 萬朝報 —— 明治期のジャーナリストである黒岩涙香が創刊した新聞。内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦らが加わり、社会批判を展開、日露戦争時には非戦論を主張した。

佐倉惣五郎 —— 江戸初期の佐倉藩の義民。命を賭けて領主の重税を將軍に直訴したと伝えられる。生没年未詳。

問一 傍線ア「ゲンジ」、傍線イ「ギ(して)」、傍線ウ「シテイ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二 傍線 a「開削」、傍線 b「怯(む)」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三 空欄

I

にあてはまる語句として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 協調と決裂 ② 拡大と対立 ③ 背景と協力 ④ 理解と批判

問四 傍線A「両者の対立点はどこにあったのか」とあるが、「両者の対立点」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ

選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 内村は足尾の被害地を訪れながらも聖書の研究に没頭していたが、田中は本郷中央会堂などで足尾鉍毒地救助演説会を開催するなど熱心な活動を続けていた。
- ② 内村は足尾の惨状に怒りを覚え広くメディアに訴えて正義を求めていたが、田中は地元の運動の代表者として明治天皇に直訴するなどの直接行動をとっていた。
- ③ 内村は鉍毒問題の解決には何よりもキリスト教の慈愛が必要だと考えていたが、田中は政治を超えたところに鉍毒問題の解決策があると考えていた。
- ④ 内村は鉍毒問題においても宗教によつて追求される超自然的目的を想定していたが、田中は鉍毒問題を現実の政治的問題としてとらえ国家に対峙していた。

問五 傍線B「吝しよく」の「吝」は訓読みにすると「吝か」となるが、その例文として最も適切なものを、次の中から一つ選び出

して、その番号をマークせよ。

- ① 私だって、そのプロジェクトに協力するのは吝かではないですよ。
- ② 新しいプロジェクトが始まったために毎日が吝かになってしまった。
- ③ 社運をかけたプロジェクトですから、皆さんにも吝かなるご支援をお願いします。
- ④ 新規プロジェクトを検討するに際し、吝かにならない提案を求めたいと思っています。

問六 空欄

II

III

IV

IIに入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- | | | | |
|---|-------|--------|-------|
| ① | II 多様 | III 多様 | IV 重層 |
| ② | II 多元 | III 多元 | IV 一元 |
| ③ | II 並立 | III 多元 | IV 並立 |
| ④ | II 重層 | III 多様 | IV 一元 |

問七 傍線C「自己犠牲の思想」とあるが、それと同じ意味の言葉として最も適切な語を、本文中から四字で抜き出して記せ。

問八 傍線D「日本にはただ政府ありて国民(ネーション)なし」とは、どのような意味か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 日本では、政府のみが「公」の権力であって、「私」としての権利を持った国民がいないということ。
- ② 日本では、治者である政府が権力を掌握するばかりで、自立の精神を持つ国民がいないということ。
- ③ 日本では、宗教も政治もすべて政府へと籠絡され、仲間のために命を投げ出す国民がいないということ。
- ④ 日本では、政権争いや主君の敵討ちが「忠義」であって、「私利」の榮達を求める国民がいないということ。

問九 二重傍線「日本の場合、大量の殺戮を伴う大規模な「宗教戦争」が起こっていない」という点でヨーロッパとは問題の現れ方は異なっていた」とあるが、それはなぜか。その理由を述べた一文として最も適切な箇所を本文中から探し出して、最初と最後の五字をそれぞれ記せ。(句読点を含む)

次の文章は、『新蔵人』の冒頭部分である。これを読んで、後の問に答えよ。(一部表記を改めた箇所がある)

中昔のことにや侍りけん、さまで上臈ならぬ人の、さりとてむげに卑しからぬ、諸大夫ばかりの人あり。男一人、女子三人持ちたりける、いづれもいづれも劣り勝ることなくいとほしく思ふ中にも、「などかいま一人男にてとりかへにもせさせざりけん」とぞ常に申しける。「いづれもありたらんままに、ただ心にまかせて過ぐし給へ。親の掟をも従へぬものは人の心なり。つひには我が心の引くに任する習ひなれば」とぞ申しける。

嫡子はもとより我が品ほどの者なれば、六位に召されて蔵人の大夫と言ふ。見様も心も優にやさしきやうなれば、御気色も良くて召し使ふほどに、朝恩などもたまはりて、いと目安し。親どもの心も、ただ一人なれば、良くて良かれ、と思ふに、いとうれし。父も、昇殿など許されぬ。

「さて、娘どもいかがありつかせん」と言へば、次第のままに、姉に「いかに」と言へば、「我はただ、妹姫たちはいかにも世にあらんことをのみ華やかに願ふも、

I

からず。何事を見聞くにも、いつまでか、とあり果てぬうき世の境のみ

せんなく、いみじきことも果てはなし。あるにつけたる悲しみ、いづれも思ひの晴るることなし。かかる世をいとひ捨てて、とくとく仏になりて、父母をも同じ所に迎へまゐらせて、一つ蓮の縁とならんことのみこそ、うれしく候はんずれ。尼になさせ給へ」と、かきくゞき言ふ。これほどに思ふらん、と前の世もゆかしくていとほしければ、泣く泣く尼になして、尊く行はせ給ふ真言の尼御禅恵が弟子に参らせぬ。時々里へも出だして、なほもいたはしさに服薬などはせさせて、念仏も申し、真言もして行ふさま、まことに頼もしく、尊く、親たちのためも、げに孝行の子とは覺えたり。

B 蓮葉の上をぞ契るふたたびと会はぬ親子の仲と聞けども

中の君は、「兄の蔵人も心憎し、宮仕ひに参らすべし」と仰せありければ、「否」と申すべきことにあらず、と思ひて、参らせぬ。播磨の II とて、心だても優に神妙なれば、人々も良き者に思ひつつあり経るほどに、内の御心にも合ひて候ひける。いつしか、ただならぬさまに悩みけり。いよいよあはれと思し召されけるこそ、いみじく侍れ。

かかるほどに、月も重なりて、「かく」と奏して里へ出づるほどに、めでたく、待ちつくる親どもも、面目ありてうれし、と思ふ。妹姫、かやうのことを聞きて、いと羨ましくて候ふ。母は姉の御弟子になれとあれども、様もなげなる尼になりて、笠被きて歩かんことをば口惜しく、後の世は、すずしく、羨ましくもなし、と思ふぞ、はかなくも、をかしまや。

注 禅恵 —— 尼僧の名。

服薬 —— ここでは、栄養のあるものを食べさせること。

檜笠 —— 檜を薄くはいで作った笠。尼などが着用した。

問一 傍線1・2を口語訳せよ。

1 いみじきことも果てはなし

2 優に神妙なれば

問二 波線a、b、c、dの主語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- | | | | | |
|---|----------|----------|--------|----------|
| ① | a 帝 | b 兄の蔵人 | c 兄の蔵人 | d 中の君の両親 |
| ② | a 中の君 | b 兄の蔵人 | c 帝 | d 兄の蔵人 |
| ③ | a 中の君の両親 | b 中の君 | c 中の君 | d 中の君の両親 |
| ④ | a 帝 | b 中の君の両親 | c 中の君 | d 帝 |

問三 傍線A「諸大夫ばかりの人」は子どもたちについてどのような言っているか、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 女の子はどの子もみなかわいいが、育てる費用がかかるので一人を養子に出せばよかったと言っている。
- ② 子どもはみなかわいいが、男の子が一人なので、女の子の一人を男として育てればよかったと言っている。
- ③ 子どもの将来は心配だが、好きなようにさせてやれば、いつかは親の望みを叶えてくれると言っている。
- ④ 子どもの将来を心配するのは親としては当然なので、子どもの思い通りにさせてはいけなと言っている。

問四

I に入る語として、最もふさわしいものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① やさし
- ② うれし
- ③ 羨まし
- ④ 口惜し

問五

傍線Bの和歌「蓮葉の上をぞ契るふたたびと会はぬ親子の仲と聞けども」に表現された内容として、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 来世では出会えるかどうか分からないが、修行して極楽浄土に生まれ変わったら、両親を同じ世界に導きたい。
- ② 現世では今後二度と会えるかどうか分からないが、近い将来、両親が出家した時には仏の前で再会したい。
- ③ 出家して尼になったからには、両親とは二度と会えないが、死後は同じ極楽浄土に生まれ変わるにちがいない。
- ④ 出家して尼になっても、仏の前で誓いを立てさえすれば、両親とはいつでも会えるのだから寂しくはない。

問六

II に入る語として、最もふさわしいものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 国司
- ② 官司
- ③ 内侍
- ④ 侍従

問七 傍線C「かやうのこと」とはどのようなことか、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 一番上の姉が出家して静かに修行生活をしていること。
- ② 中の君が帝の寵愛を受けて子どもを身ごもったこと。
- ③ 兄の六位の蔵人が宮中で華やかな生活をしていること。
- ④ 兄弟がそれぞれの生き方で両親を喜ばせていること。

問八 本文で語られている内容に合致するものとして、最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 三人の姉妹のうち一番上の姉は、前世からの因縁もあつてか出家を強く願った。
- ② 三人の姉妹のうち二番目の娘は、宮中に仕える身となったが病により退出した。
- ③ 三人の姉妹のうち一番下の妹は、尼になつた姉をとともうとましく思っていた。
- ④ 嫡子である蔵人の大夫は、宮中での役目を務めながら両親や姉妹の面倒をみた。

次の文章を読んで、後の間に答えよ。(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)

林羅山洽博、^{かふ}於^{はくニシテ}天下^a書^ニ無^シ不^ル読^マ。其^ノ所^ノ著^ス凡^ソ百有余部、皆^キ可^レ

伝^フ也。本集百五十卷^{アリ}。雖^A詞不工、其言足^B徵^{スルニ}者甚^ダ多^シ。暮^ぼ年^{ねん}視

聽^レ不^レ衰^ヘ。勤^ニ力^ニ猶^ホ少^シ年^ノ。二^ニ十^ニ一^ニ史^ハ、自^レ少^キ讀^ム之^ヲ者^ノ數^ニ回^ニ。而^{シカレドモ}晋書以

下^レ未^ダ句^セ。及^シ二^ニ年^ニ七^ニ十^ニ四^ニ、欲^ス遍^ク句^ヲ之^ヲ。是^ノ歲、晋書・宋書・南齊書、畢^ヘ

業^ヲ翌^ニ年^ニ蓋^フ棺^ヲ。

〔先哲叢談〕より〕

注 林羅山 —— 江戸初期の儒学者。

洽博 —— 知識等があまねく広いこと。

徵 —— 引用すること。

二十一史 —— 『史記』から『元史』に至る、中国の歴代王朝の正史。

晋書・宋書・南齊書 —— 中国南朝の晋・宋・南齊の正史。

問一 傍線 a「於」・b「自」の読みとして、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① つきて
- ② おのづから
- ③ ありて
- ④ おいて
- ⑤ より
- ⑥ こと
- ⑦ とき

問二 傍線 Aを書き下し文にすると、「詞工みならずと雖も」となる。これをふまえて、「雖」と「不」の部分に返り点を付けよ。
(送り仮名は不要である)

問三 傍線 B「足徴」の「足」と同じ意味の「足」を含む熟語はどれか。次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 充足
- ② 蛇足
- ③ 足跡
- ④ 足下

問四 傍線 C「勤力猶少年」を、内容がわかるように口語訳せよ。

問五 本文の内容に合致するものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

- ① 羅山は、良書を捜し求めては、若者に推薦した。
- ② 羅山は、多くの書物を利用して、歴史書の解説を書いた。
- ③ 羅山は、晩年まで、読書への意欲を失わなかった。
- ④ 羅山は、多読よりも、むしろ精読を優先した。